

現代文化と柔道の位置への考察

長 谷 川 泰 一

序 論

《現代の病弊の中で》

コンピューターの時代である。機械によって人間が支配される現代でもある。世の中の、一つの巨大な動きと流れが、類型化し、画一化し、無思想化した機械主義の中で営まれ、発生し、さらに伸張してゆこうとしているのである。こうした時代の中では、人間の存在は機械化され、画一化されて、人間が人間であるところの生存本来の意味を見失ってしまう傾向が強い。

昔は、都会と農村という、区別された地域社会が、独自の文化と生活を持ち、育てて、生きていた。現代は、生活的に言えば、都市と農村の、《本質的な命》ともいうべきものが消滅しつつある。

くだらない建築家と土地ブローカーが結託して、農村へ団地を造成し、細い木材と紙と合板の、同じ形をした、ひよろひよろの分譲住宅を建てる。また、その反面では、国や地方自治体が、高層の鉄筋住宅地帯の造成にのりだして、あっという間に、ビル団地が雨後の筍のように生まれてきている。いわゆる団地族、団地社会を生みだしてきた。流通経済機構が更に極限にまで組織化され、分類化し、消費面ではデパートやスーパーが、その代表的な荷い手となり、人間の生活を、彼等の思うままに支配している。

都市も農村も、日本列島全体の食生活、衣生活までが同じテンポで、同じ感覚で、まるで飼われている犬や猫のように馴らされているのである。

《人間性の喪失》というコトバが流行する。若い者の兇悪犯罪がこのコ

トバに結びつく。学生のゲバ棒革命騒ぎが報道される。東京も九州も長野も北海道も、テレビやラジオによって事件を知らされ、解説をうける。おびただしい文化人の、きまりきった論説が新聞や週刊誌を賑わしているが、また嵐の去ったあとのような、むなしい静けさが日本を蔽うのである。機械化された文明のシステムの世界で生きてゆくために、人間は思想を忘れ、考えることから遠ざかってしまう。考えるよりは、ボタンを押した方が楽で、かっこよいのである。

《知性の崩壊》という表現もこれに続く。特に都市周辺の農村では、体質改善という名目で農村の機械化、即ち都会化が行なわれてゆく。人間はことごとく多忙である。競争も激しい。

巨大な資本が小資本を凌駕し、抑圧し、打倒して、都会化のスピードを更に助長している。

もう、農村らしい本来の命は皆無と言ってもよいであろう。

機械化という文明の在り方は、完全なインターナショナリズムである。国と国のちがいなどというもの、いわゆる国境という姿が奇怪に思えるほど文明は世界化してきている。それぞれ独自の文化は存在する。だが国際的に画一化した文明と、そのスピーディーな普及性と吸収率は驚くほどである。

東京も、ニューヨークも、パリも感覚的に言って、大した差違はない。アフリカなどは、世界のレジャー人口の増大によって、世界のためのアフリカとなってゆく。国境などというセンスは現代感覚から遥かにズレたもので、世界人にとっては、むしろ、このコトバは後進性の違和感となって与えられている。

文化人達は、これらの現実を一括して「文明の廃墟だ」と、うそぶいている。

日本の現状など、まだ、変化の兆を示し始めてはいるが、文明の廃墟などという風景は一つもない。

なにかが生まれてきそうである。たしかに、かつての日本の生活は、もちろん現実の日本にはない。あたらしく生まれ、生まれようとしている、

なにかが、おそろしいほどの若々しい爆発性の芽をあちこちに吹きだしている。この現象をとらえる眼を曇らせてはいけない。画一主義が機械化された文明の波動から生まれていることは確かであるが、そのこと自体が「いのち」の本質ではない。インターナショナル化してゆく傾向は更に深まってゆくことは確実であるが、そのことが、文明の廃墟を意味しているのではない。ゲバ棒革命の世界化が進んではいるが、それは一部であって、しかも、それが現実の本質ではない。

ただ、これらのインターナショナル化してゆく流れの中から、なにかが、きっと生まれてくるのである。

文化や文明は、決して今も崩壊してはいないし、人間性の喪失もない。ただ危機感という感受性の強い考え方、というよりは、感じ方の表現のみによって、現実を早のみこみで理解しているにすぎない。これらの風潮は全く空虚で、とらえようのない、現代の知的幽霊なのであろうか。こうした流れの中から、日本の国技である柔道について考えてみよう。

本 論

〔A〕……《柔道発生の歴史と源流》

あらゆるスポーツが世界化されている現在の中で、日本の柔道も、今では世界のジュウドウとして愛されている。それだけに柔道に対する考え方、とらえ方、扱い方もインターナショナル化してしまっている。オリンピック化された柔道がある。敗戦までの日本の中の柔道、日本人の柔道といったナショナルなものは影をひそめてしまった。今の柔道は世界化されて、世界の中の柔道であり、国際化された柔道である。

しかし、そうだからと言って、柔道のもつ東洋的な魅力が失われてしまった訳ではない。依然として柔道は柔道である。

人類が地上に発生した頃は、巨大な猛獣のために苦闘し続けた。鉄砲もなく、刀もない原始時代の人類は、森林や草原の中で出合った野獣に対して、素手で自分の肉体を武器として闘ったのである。また猛獣だけではな

く、人類同志が敵対を続けていたので、闘いは毎日のように続けられた。いかにしたら自分の命を守ることが出来るのであろうか、そのみを念ずる深刻な状態であった。

このように人類の原始時代を想う時、柔道の起源が案外わかるような気がする。

人類が己の生活を守るために、格闘の術は生まれた。食うことよりも眠ること、愛することよりも、戦うことが重視された時代である。この格闘術は、アングロサクソン民族の祖先も、ラテン民族も、今日の世界人類の祖先のすべてによって研究工夫されたことであろう。

日本民族も同様にこの格闘術について苦心したにちがいない。これが日本の環境と国民性の中に育ち、経験と研究によって次第に系統づけられて現在の柔道を形成させてきたのである。

それでは文献として、柔道史に登場したのは、いつ頃なのであろうか。

日本の歴史上の記録として古いのは、天明天皇和銅5年(712)に撰せられた「古事記」に述べられている。出雲国譲りにおける、武甕槌^{たけみかつちのかみ}神と建^{たて}御名方神^{みなかたのかみ}の力競べの条である。

その次は、垂仁天皇7年の秋に、当麻蹴速^{たいまのけはや}と野見宿弥^{のみのすくれ}の角力(すまい)の事が日本書紀に綴られている。それによると、野見宿弥は当麻蹴速の肋骨を折り、腰を踏みくだいて死に至らしめている。

この勝負は相撲の起源としても説かれている。問題になるのは、柔道とスモウとどちらが先に起こったかという事である。その動作によって考察すれば、相撲よりは柔道に近いとされる。これが戦場で、組打の術として練習されるうちに、一方は相撲に、他方は柔術に転化したと思われる。何れにしても、記録から、日本において自然発生的体技(自己防衛の術)が、前紀時代から存在していたことは確かである。

そして歴史はぐっと下って、武家時代に入ると、戦国のために「術」の研究が多くなってきた。この時代から柔道が術として形をとり始めたともみてよいのである。

日本柔道が、このような歴史の積み重ねの中で成長し、発展し、科学化

されて、今日では世界の中の柔道として国際化されて生きている。

それだけに、単なる護身術であったり、テレビ・ショウの材料であったり、オリンピック化された柔道であってよい訳ではない。世界化されて普及はしているが、柔道のもつ深い魅力は決して失われてはいない。柔道は機械化時代の中で俗説にも流されず、厳しい光りをたたえて己を見守っている形である。

〔B〕……《柔道と人間の生と死》

人間の自己保存のための闘争本能から発生した体技は、武家時代に入ると、武家の生活手段として、戦場において、いかにして敵を制するかが一大問題となった。

負けることは死ぬことである。この真剣な事実にあって、秀れた攻撃防禦の術が大切であることは当然である。だから、組討（くみうち）、取手（とりて）、小具足（こぐそく）、鎧取（よろいどり）、腰廻（こしまわり）等の名前が生まれた。ここに柔道と相撲の区別ができてくる。

柔術においては、生か死の問題である。相撲を専業とする者とは、おのずから目的も性質も異なるのは当然の成り行きといえよう。この実戦的攻防の術が盛んになると、経験、工夫の積み重ねによって、「柔よく剛を制す」の原理も判ってきた。力の巧妙な使用によって、己よりも巨人、強者を効果的に制することが出来る合理的な体技を考案するようになった。

これを、柔（やわら）、柔術（じゅうじゅつ）、体術（たいじゅつ）、と呼称するようになった。そして独特の秘術が編みだされる結果となって、名人があらわれ、技術面を体系的につくり、門人に教授し、術を育成し、保全し、誇示するために各流派を唱えるに至ったのである。

例をあげると、茨木左又エ門のはじめた起倒流、関口柔心の関口流、又は竹内流、揚心流、扱心流、渋川流、天神真揚流などはその主なものである。

この諸流派が、互いにその術を秘として、技を競い合う結果となり、入門者も増加し、無手攻防の術として世の中に知れわたった。

寛永年間から徳川中頃までに全国至る処に道場の数は増してきた。流派だけでも数十を数えるほどになった。

ところで、武家が生死の手段として取り上げた柔術であったが、柔術の完成へと精進するにつれて、生死の手段としての柔術をのりこえて、奥深くにある「あるもの？」を凝視して考えるようになり、柔術修行を通じ、人間として精神の修業、練磨を自覚するようになった。これは武家にとって賢い大きな発見であったと言えよう。

徳川中期になり、世に戦乱の憂いが少なくなり、徳川泰平の春が人々の心を落ちつかせ、武家も生死の憂いや危険が薄らぎ、柔術の技術が形として組織づけられ、形を主体に鍛練し、その極意を修行するようになった。

歴史の変遷によって柔術は明治に入り全く存在が薄らぎ、それは昼間の照明に似ていた。

しかし、柔術が波の高低はあったにしても、柔術の一形態を形成した事は確認されるのである。

〔C〕……《柔道の再生期は武家政治没落のあとに》

武家により集大成され、武家によって形態を整えた柔術が、武家政治の没落とともに危うく地に没し去ろうとした時に、廃滅の危機から身をもって救いあげた偉人は有名な嘉納治五郎先生である。

彼は18歳の時から天神真揚流（当身技、投技、固技）を福田八之助、磯正智について学び、その後、飯久保恒年について起倒流（投技）を学びその極意を極めた。

以前の柔術は、大体、柔の理によって説明できたと言っても、各流派が雑然と存在し、技においても、ある流派は投技、固技に偏重し、ある流派は当身技を主としていた。だから全流派を貫いている系統的な根本原理がなかった。

柔術の流派が数多くあっても、筋の通った根本原理がなくてはなんにもならない——これは当時、東京大学在学中の彼が日夜真剣に哲学していた大目標であった。

そして、天神真揚流、起倒流の二流を基礎とし、多くの流派の長所を総合し、更に研究工夫を重ねた。

こうして彼はその厳しい探究を通して、柔術が体育として、精神修養と

して、甚だ有効であることを体験すると共に、柔術の練習において、攻撃防禦の法が、心身の力を最も有効に使用する道であること、精力善用の道であることを発見し、この道は又、人生社会発展の大原則であるとして、柔道と名づけられた。そして柔道を修行する順序や方法を、理論と実技に基づいて定め、社会の人々によびかけ、その修行をすすめるために講道館を設立し、理想の第一段階は築かれたのである。

講道館の創立は明治15年（1883年）である。当時、彼は23歳、東京下谷の永昌寺の一部を借りて住み、その寺の一間、12畳敷を道場にあてたのである。

ここにおいて、柔道は、柔術という自然発生的な練磨の歴史と技術のなかから、近代思想の洗礼をうけて根本原理は明らかにされた。

今まで、攻防の術の練習によって、無意識的に身につけていた肉体完成や、原始的に理論づけられていた精神修養価値が、はじめて近代思想と近代科学の上に立って探求が続けられるに至ったのである。

もはや、柔道は柔術の改称ではなく、柔道の新名称と共にその内容は充実した。根本原理の確立は、社会の根本問題として、生活の改善、能率の増進など社会生活の原理ともなった。

新柔道は不変の原理をもつことによって、明治、大正、昭和を通じて、代表的な国民体育として親しまれるに至ったのである。

〔D〕……《柔道の飛躍期について》

日本で生まれた柔道はめざましく発展した。日本のみではなく、全世界から愛好された。アメリカ、イギリス、フランス、ソ連などの大国はもちろんの事であった。

昭和13年、嘉納治五郎の逝去と相前後して始まった第二次世界大戦を契機として、柔道は戦技武道の一環として戦時色を帯びていたのである。真の柔道とは程遠い当身技を主として構成され、軍隊の一部でのみ利用されるだけになって「柔道どこへ行く」という感をうけるようになった。この没落的状態は終戦後も尾をひき、柔道はついに消滅の運命に見舞われるかの状況下にあった。

こうして柔道が悩み続けている時、諸外国の柔道は、活発な練習を再開しだした。国際大会が開かれ、全世界の人々も、柔道への親愛の熱を高め、柔道を結ぶ国際的色彩は強くなった。

海外の華々しい柔道活動の噂に接する時、国内の柔道関係者はいらだたしい思いをしていた。

戦後、日本の国民道徳は失われ、青少年の体位は低下し、精神も肉体も失いかけた国民の危機を救うものの一つとして、柔道の復活を願望していたのであが、柔道即戦技武道といった観念が柔道の再開をはばんでいたものであった。しかし、諸外国において国際スポーツとして柔道が展開されていることによって、日本においても、柔道の本当の価値を再検討し、国民の世論をよびおこした。こうして柔道はスポーツとして再発足できることになったのである。

柔道の歴史を顧みるとき、一転、二転、三転しながら、いつも、その正しき道へ押し進められてきた訳である。全国の柔道団体は統一されて、昭和24年5月、全日本柔道連盟は結成された。

同25年10月には柔道が国体オープン競技として採り上げられ、日本体育協会に加盟した。

そして名古屋における第5回国民体育大会から正式競技として加入し、復興のスタートを切った。昭和26年4月からは終戦後、長く絶えていた学校柔道が、中学校以上に正課として採り上げられる事になった。

昭和26年12月には国際柔道連盟（I・J・F）が発足し、この会長には全日本柔道連盟会長である現講道館長嘉納履正が初代会長となり、日本柔道は名実ともに国際柔道にまで発展するに至ったのである。そして世界柔道選手権大会が開催され、日本と外国選手が王座を争うまでに大躍進をとげた。

かつてのオリンピック委員の嘉納治五郎の念願は1964年第18回東京オリンピック大会の正式種目となることで実現し、武道館において熱戦が展開された。又彼が講道館柔道の創始者であると同時に日本教育界の先駆者でもある事を忘れてはならない。

柔道こそは、日本に発祥し、日本に育った純粹の民族スポーツである。日本が世界に誇る国産の文化財なのである。それだけに私達はその重大な使命に徹するため、自分に厳しくあらねばならない。

かくて日本武術の一種にすぎなかった柔術は、技術的、思想的に大きく転換し、近代スポーツ柔道として世界的に普及したのである。

〔E〕……《柔道は何のためにするのか》

柔道は何のためにするのか、柔道の修行に当って、その目的がはっきりしていなくては無意味である。

柔道の修行によって、精神生活の土台に誠実な精神が養われると同時に、人生の苦難に対して、動ぜず、恐れず、賢く、正しく、いつも熱情をもって、心身を最善活用し、人生を征服する合理的方法こそ、柔道を学ぶ過程において体得せねばならない。

次に柔道の練習そのものは、身体を均整に発達させる体育であり、スポーツである。

スポーツは「美と力」の表現とされ、美と力が理想的に表現される事において柔道は最も秀れたスポーツの一つであろう。

そしてまた、人が危険に遭遇した時、柔道の技は、自己防衛、安全の術として生命を守ってくれるのである。こんな実利を持ったスポーツの存在は他に見当らない。

なお、技の理論において、スポーツ科学の立場から多くの専門家によって研究されてきたが、実に合理的に構成されている事において結論が一致した。

また身体機能、構造の持っている限界の中に、技が組み立てられているので、生理的、解剖的にも無理がないのである。

「柔よく剛を制す」の例えのように、柔道の不思議な技はすべての力学の原理に基づいている。その重要な基本原理は、合力の原理、テコの原理、重心の原理である。この三原理を中心として、非力の者が強い力の者に優る力をだすように考案されている。

練習者は理論でなく、一にも二にも練習により多種の技を体得し、自分

の体力に適した得意技を身につけるのである。

柔道の練習には、広大な競技場ではなく、比較的簡単な場所で練習がはじめられる。

時、場所、人の点について、柔道ほど庶民的なスポーツは少ない。

また柔道は他のスポーツと同様に規則を厳守し、また力学の原理を応用し、物事の合理性を体得する。その一過程において寛大なスポーツマンシップ即ゼントルマンシップが自然に養われるのである。

以上の概念について、もう一步、具体的に説明を加えておきたい。これを項目的に語ってみよう。

〔1〕 心をねる

〔2〕 身体を鍛える

〔3〕 身を護る

の三項目につきる。

〔1〕 心をねるという意味について

柔道は、全身全力を一丸として闘うのであるから、強力な精神が要求される。またチームゲームと異なって、個人技を主とするために自主的精神が心要となり、自然に積極性が養われる。また、人と人とが相対的に演ずることから自他の制禦についての心理関係が生じ、克己心、不屈、剛毅、果敢、忍耐、沈着の精神力が培われるのは当然のことである。

また柔道の技は、走る、投げる、跳ぶの様に単純な形でない。表現が千変万化、複雑多岐であることは、瞬間的な心身の変化に応じて、判断は敏速、正確になる。思考は緻密周到になる「無心而入自然之妙、無為而窮变化之神」である。まことに真理を転々と追求してやまない精魂の荒行であろうか、そのためにこそ崇高な品性が磨かれる修行道となる。

このように、柔道の修行では特に真剣な気分が尊重される。試合では精魂のこもった敢闘精神が重視せられ、正々堂々と全力を尽くして闘えば敗れても悔いなく、勝敗の結果を云々するよりも、むしろ、その闘志と態度が尊重される。勝敗のみに執着しない、淡泊な明るい精神が養成されるのである。

〔2〕 身体を鍛えるという意味について

柔道が形式をもって表現されるときは、体技となるのである。体技の一挙一動は、身体各器官と密接な関係をもち、身体の各部はそれぞれ最高度の活動をするという訳である。しかも柔道は、相対関係で演技が競われるので、一つ一つの瞬間が遅滞してはいけない。どんな瞬間でも、相手の出方に即応した技が施せるように敏捷で瞬発的な動きに勝れた身体が創られてゆく。正しい練習方法によって、筋肉、骨骼が強化され、内臓器官は丈夫になり、均整のとれた肉体が鍛えあげられるのである。

〔3〕 身を護るという意味について

日常生活において、思いがけない危険に見舞われる事がある。この頃の世相では、兇漢の危険、不慮の事故に直面しても、柔道の修行者においては、未知者よりも自己に対して確信が持てる訳である。

柔道は体育であり、自己防衛の術でもあるから、柔道で技術を錬り、身体を鍛え、精神を修行する心・技・体の三要素は当然のことであるが、このような危害から身を護るための自己防衛の術を、練習を通じて自然に修得するのである。

結 論

《柔道と人間性》

私は序論の中で、現実の日本社会は、《機械化主義に蝕まれた、画一主義と無思想と病的な文明観が支配している。しかし、この現象は真実に触れてはいない。命ともいふべき本質は依然として存在している》と述べた。

現代文化の流れの中で、《いのち》を探究する芸術家は沢山いる。陶芸人も何百年前と同じような態度で《作品》と対決し、これに生涯をかけている。生活の現象のみを捉え、これをコトバに表現して満足しているといった風潮を私は《空虚で意味がない》と言った。

その通りである。

断片的で、動物的で、感情的で、むしろ衝動的な現代文化（それは文化

というべき代物ではないだろう）と断言している。

柔道は、魅力をたたえた仏教道に似ている。

物理学と宗教性が同居していて、しかも、その一つ一つが芸術的である。

柔道は、スポーツであると同時に、立派な芸術なのである。

柔道に生涯をかけている人間と接してみるがよい。他の芸術家との相似点を必ず発見するであろう。

世界化され、スポーツ化された柔道ではあるが、柔道の持つ東洋風の味わいは永久に消滅することはないだろう。

投げる、勝つ、といった柔道のかたちよりも、柔道に生きる人間と人間の相対性と、演者個人の苦しみや歓びが、いいようもない感動と美を綾なしてゆくのである。

柔道の魅力はここから始まって消えることはない。

世界化された柔道、むしろ当然とも言えよう。世界人が、すべて柔道家であってほしい。

片々と生まれ、あとかたもなく消え去ってゆく世相の中で、柔道は今こそ、しっかりと根をおろすべきである。柔道を理解し、柔道を修行する人々が、ひとりの社会人として、また、ひとりの世界人として、なさねばならぬ仕事は山積している筈である。

ジイドはうまいコトバを述べている。それは《改造すべきは、単に世界だけでなく、人間。その新しい人間は、どこから現われるか？ それは、外部からでは決してない。友よ、それを自分自身に見出すことを知れ。》

柔道の、《いのち》に触れたコトバとして、私は結びにこれを添えておきたい。